

≡ 文化財だより

特集

石材業の歴史

皆さんは友達やお知りあいの方に町を紹介する場合、どのようなことを話されますか。

昨年、町で実施した住民意識調査の結果によると、多くの方が新鮮な魚介類、温暖で海と緑に囲まれた自然環境、貴船祭や小松石のことを話されています。

そこで今号では、古い歴史を持ち現在でも真鶴の産業を代表する石材業に焦点をあて、特集を組みました。

(一) 石材業の起源

石材業の歴史は大変古く、役場前の丘の上にある『石工先祖碑』の碑文は、保元平治の乱後（一一六〇頃）、土屋格衛が石材業を始めたと伝えています。

また、「岐阜県養老郡時村にある龍淵寺の墓地から今から千二百年前の奈良朝時代の相州産小松石の墓石が発見され、科学的調査の結果確証を得た」という記述が日本石材振興会編『日本石材史』にあります。

なお、現在ある石工先祖碑は嘉永の震災（一八五三）で壊れたので、安政六年（一八五九）に再建されたものです。

石工先祖碑



目次

「特集」石材業の歴史……………1～3

(一) 石材業の起源

(二) 鎌倉時代

(三) 戦国時代～近世

・城郭建築と石材業

・海運の発達と石材業

・幕末期の海防と石材業

(四) 明治時代～昭和初期

(五) 現在の石材業

小松石の誕生……………2

石材業関係年表……………2～3

町史編さん室レポート……………4

民俗資料館インフォメーション……………4

郷土研究クラブ紹介……………5

岩小学校郷土研究クラブ……………5

真鶴中学校郷土研究クラブ……………6

真鶴地名考～石材業にかかわる地名～……………7

町文化財審議委員 遠藤勢津夫……………7

《資料》 石材業史関係町指定文化財一覧……………8



宝陵印塔

(二) 鎌倉時代

真鶴付近の石材が伊豆石、又は相州石といわれ、広く用いられるようになったのがこの時代です。主に幕府所在地である鎌倉の都市整備や社寺の建築などに用いられました。日本最古の築港遺跡である鎌倉市材木座海岸の和賀江島、鎌倉市極楽寺にある関東で最大級の供養塔忍性墓、北条氏一族の墓石、諸寺の礎石などに使われています。

(三) 戦国時代・近世

〔城郭建築と石材業〕
室町期に衰退していた石材業は、戦国時代になり、後北条氏の関東支配以後の

城郭建築隆盛にともない、大きく発展しました。

真鶴が石材の産地として有名になったのは、江戸時代になり、江戸城の修築工事の際に大量の石材を供給してからです。その後も幕府の命による石材提供等のため、紀州、尾張、水戸の御三家及び松平家、黒田家などの大名が、町内の各所に丁場（採石場）を開き、石材を切り出し、江戸に送りしました。これは、『江戸城用石と石銘』、『水戸殿石場の碑』や多くの古文書に記されています。

筑前・福岡藩では、小河織部正良を採石奉行として真鶴に派遣し、正良は石工七名を引き連れて来て、口開丁場を開きました。このことを『石工先祖碑』には

中興の祖として、七名の名を刻んで今に伝えていきます。また正良は、寛永十二年、主君黒田長政の十三回忌にあたり、供養塔を西念寺に奉納しました。現在でも、その門前には、供養塔が保存されています。



銘のある石

〔海運の発達と石材業〕

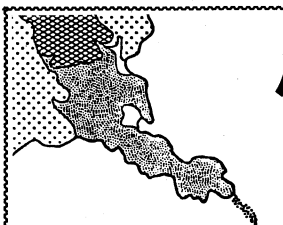
江戸時代における真鶴の石材業の繁栄を支えた条件は、大消費地江戸に近かったことと、良港を有していたことです。

当時の石材の輸送は海運によるものがほとんどで、真鶴港は石材搬出の中心でした。それは、慶安二年（一六四九）には、岬の最高所に灯明台が建てられていたことからうかがえます。現在でも当時の礎石が残っており、そこは灯明山と呼ばれています。

石材業関係年表

- 七五六 相州産小松石が岐阜県養老郡時村龍淵寺の墓石に用いられたいわれている。
- 一一六〇 この頃、土屋格衛が石工をはじめたと伝えられる。
- 一一九二 この頃、鎌倉の都市づくりや寺院の建築、墓石などに、箱根、伊豆等の安山岩が使用される。
- 一四六九 石工先祖の碑が初めて建てられる。
- 一五七一 石材の産出がさかんとする。
- 一六〇三 この頃、五味伊兵衛が石屋善左衛門の依頼で用石を船で江戸に運ぶ。
- 一六二〇 岩の口開け丁場が黒田長政によって開かれる。
- 一六四〇 この頃、岩の石切丁場は10カ所となる。
- 一六六〇 この頃、岩の石切丁場は56・57カ所となり、石材業は盛況となる。
- 一六七二 この頃、真鶴の石切丁場数は10カ所となる。
- 一七一― 岩沢丁場をめぐり岩、吉浜間に争いがおこる。
- 一七二三 岩が領主より築石課役につき前金貸付けを願い出る。
- 一七二五 岩が石材業不振のため漁業渡世を願い出る。
- 一七四六 決着済みの岩沢丁場をめぐり岩、吉浜村間に再び争いがおこる。
- 一七六七 滝門寺の宝篋印塔が建てられる。
- 一八三二 星ヶ山の石切丁場をめぐり岩、江ノ浦両村間に入会論争がおこる。

小松石の誕生



- 本小松石
- 三ツ石
- 無斑品安山岩
- 新小松石

真鶴の銘石「小松石」は、約40万年前から始まった箱根古期外輪山の活動の末期、

今から約15万年前に誕生しました。

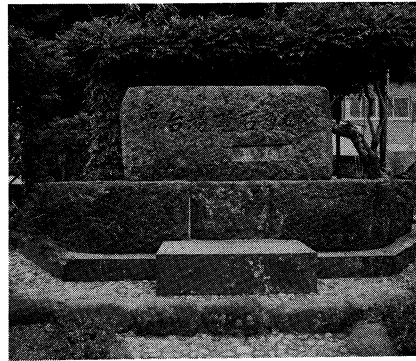
小松石の名称の由来は、駅裏にあった小松山から多く産出されたことからつけられたということです。

小松石には「新小松石」と「本小松石」があり、輝石安山岩に分類されます。

石質は硬く、耐久性、耐火性に優れています。研磨をすると独特の灰色・淡灰緑色の緻密な石面が柔らかな光沢を発します。新小松石は駅から岬の先端までの範囲で、厚さ数十メートル以上あり、本小松石よりも生成年代は古いものです。本小松石は、星ヶ山付近から噴出した粘性の高い溶岩流で、駅北方の急斜面から多く産出されます。新小松石よりも目が細かく安山岩の中では最高級品とされています。

また、「豆相海浜浦々図」には享保五年（一七二〇）頃の真鶴港の記載があり、港として重要な地位を占めていたことがわかります。

江戸中期から後期の石材の需要は、墓石や城の補修用材が主で、町指定文化財の古文書にも記されています。



品川台場礎石の碑

〔幕末期の海防と石材業〕

幕末の黒船来航後（一八五三）、沿岸防備のため品川をはじめ各地に、また真鶴の岬の先端にも台場が築かれました。

これらの台場には、真鶴の石材が用いられ、現在その一部が品川台場礎石の碑として、鳴瀬地内に保存されています。

江戸時代を通じ、石材業は需給関係の不安定などから幾度か不景気や石丁場をめぐる争いなどを繰り返したこともありましたが、漁業とならぶ産業として存続してきました。

（四）明治時代（昭和初期）

明治維新以後には、建築用材としての需要が多く、陸上交通網の整備に伴い各地へ大量に輸送されるようになりました。

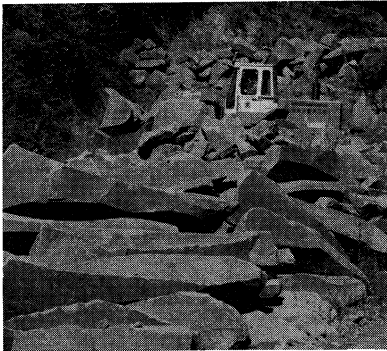
明治末期から昭和初期までにかけては、多数のビルの台材、外装材として使用されました。

代表的な建造物として、次のものがあります。

- 東京大学工科・大学本館（明治二十一年）
- 宮内省図書寮（昭和二年）
- 早稲田大学記念講堂（昭和二年）
- 八重洲ビルディング（昭和三年）
- 白木屋（昭和六年）

（五）現在の石材業

戦後は、加工技術を生かした墓石・石碑等（角石）や、河川工事・道路側壁の石積用に使われる間知石の需要が伸びま



現在の石丁場

した。
また、大型機械の導入により省力化ははかられ、高度経済成長を背景に、港湾の構築や修築用に需要の多い割栗石の生産も伸びました。
最近では、切り出したままの状態で、庭園や公園などに多く使用されています。
なお、三月に開館した中川一政美術館には、建築用材として、小松石が多く使われています。

真鶴町石材生産高表（昭和62年）		
事業所数／32		従業員数／120人
生産品名	数量（トン）	金額（千円）
割栗石	139,174	69,587
雑割間知石	18,976	170,784
割石（庭石）	76,437	38,219
角石（本小松石）	7,380	1,107,000
角石（新小松石）	1,600	96,000
砕石	129,821	246,659
合計	373,388	1,728,249

（資料：県石材協同組合）

- 一八四四 岩カ石材不振のため漁業への転職を願い出る。
- 一八四五 増上寺広大院の宝塔用石が切出される。
- 一八四八 岩が再度領主に漁業への転職を願い出る。
- 一八五〇 真鶴岬に台場が造られる。
- 一八五三 品川台場の用石が切出される。
- 一八五五 増上寺心観院の宝塔用石が切出される。
- 一八五九 江戸城本丸献納石が岩村から切出される。この頃、横浜港増上寺昭徳院の宝塔用石が岩から切出される。
- 一八六六 この頃、石材業が次第に活気をとりもどす。
- 一八七七 東京（帝国）大学工科本館建設に新小松石が用いられる。
- 一八九六 小田原熱海間に人車鉄道が開通する。
- 一九〇〇 この頃、岩の土屋次郎が茨城県に進出する。
- 一九〇六 小田原熱海間に軽便鉄道が開通する。
- 一九一〇 この頃、千葉県富津砲台築造のため、岩の陸軍丁場が開かれる。
- 一九二二 熱海線が真鶴まで延長される。
- 一九二三 関東大震災がおこる。
- 一九二七 宮内省図書寮、早稲田大学記念講堂などの建設用石として、小松石が切出される。
- 一九二八 八重洲ビルディング建設用石として小松石が切出される。
- 一九三三 真鶴漁港が完成する。
- 一九四一 この頃、軍事施設の建設工事の用石に小松石が切出される。
- 一九五九 この頃、日本経済が成長期に入り、小松石の需要が増大しはじめる。
- 一九七〇 この頃、石材業の採石、加工の各分野で経営の近代化が進められる。

町史編さん室

レポート

資料の収集と整理

「真鶴町史」編さん事業は、前号にてご案内のとおり昭和六十二年年度を準備期とし、本年度から平成四年度までの計画です。すめられています。六十三年度は主に役場や教育委員会所管の記録類の整理、そして平成元年度は、町内所在の収集にあたります。資料とは大きく分けて、

- (1) 明治時代よりも前の書画・工芸品・生活用具
- (2) 明治・大正・昭和時代の記録（手記・刊行物・写真）・家庭用品・民話・民俗資料
- (3) 古謡・風俗生活・災害・戦争に関係した話題

などをさします。これら郷土の歴史を語る大事な資料を町民の皆さんから提供していただき、より良い「真鶴町史」ができ上がることを願ってやみません。

皆さんにご協力いただく具体的方法について詳しくは近々「町報」や学校筋を通して、また直接担当の者をお願いに上がることとなります。まず一般のご家庭でどんな物が「資料」となるのか、はたしてそのような物が「わが家」にあるか、とお考えになると思います。そこ

で、その心づもりをいただく意味で一言で申しますと、

- (1) 古い（江戸・明治・大正・昭和）時代の国や郷土や家庭のことにかかわりのある

- (2) 戦争中のことにかかわりのある

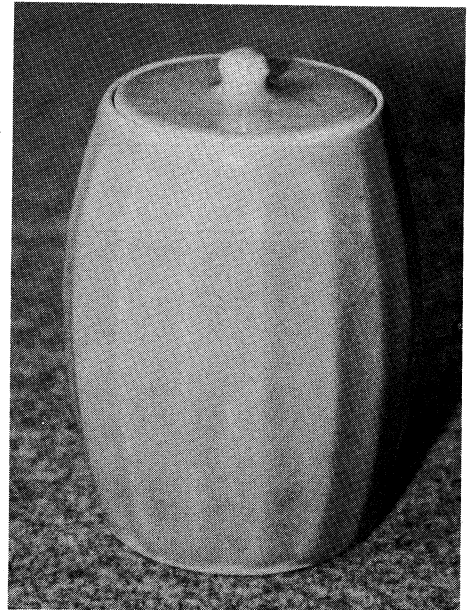
- (3) 戦後——岩・真鶴町村合併時（昭和31年）まで——にかかわりのある
- そうしたものであれば、書かれた物、使った品、聞いた話・体験談などすべて分量の多少にかかわらず「資料」となります。お心掛けの上、こんな物はどうだろうかとお気軽にご連絡下さるようお願いしています。

連絡：役場内線202 町史編さん室



資料を検討する職員

民俗資料館 インフォメーション



バーナード・リーチ作 陶磁器

民俗資料館に展示されている品々の中に、バーナード・リーチ作の陶磁器があります。今号では、作者のバーナード・リーチ（一八八七—一九七九）についてご紹介いたします。

英国人リーチは、日本で陶芸に開眼し、自国のやきものに新風をもたらし、東西文化の融合を、陶芸を通じ具現化した作家です。

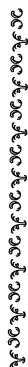
一八〇八年香港に生れ、三歳まで日本で育ち、明治四十二年二十二歳の時、再来日しました。上野桜木町に居を構え、白樺派の同人や岸田劉生などに銅版画を教えていましたが、楽焼に接し、興味を抱くようになりました。そして、六世尾形乾山に入門し、本焼の技法を修得し、陶芸家への道を歩むに至りました。

大正九年に帰英し、コーンウォール州

セント・アイヴイスに窯を築き、国際的な活躍を続けました。

九十二年の生涯のうち、日本には十一回来訪し、各地で制作や講演を行うとともに、「白樺」の同人であった柳宗悦らと民芸運動に力をそそぎました。

画家として出発したリーチは、素描に巧みであり、陶画にも優れた才質を発揮し、また、多彩で独創的な文様を生みだしました。



●開館日時 毎週火・木・土・日曜日

及び祝祭日

午前十時から午後四時まで

●入館料 無料

●展示品 美術工芸品・生活用品・

漁業、石材業の史料

クラブ紹介 岩小 小学校郷土研究クラブ

担当の鈴木洋一先生の指導のもとに、

5・6年生9名が研究活動をしています。

町内外の史跡を訪ね、積極的に活動をしているとのこと。

これからも、郷土を愛する心を持って活動を続けて下さい。



郷土研究クラブに入って

6年 遠藤 充朗

ぼくは、このクラブに二年間入っています。5年生の時に行った湯河原の鵜窟と鎌倉の昔のふんい気や、今年行った真鶴の鵜窟と石丁場などが、印象に残っています。いろいろな所に行ったり、それを模造紙にまとめた大変だったけど、やっていてよかったと思います。

6年 渡辺 智廣

ぼくは、このクラブに二年間入っていますが、おもしろかったです。例えば、真鶴で有名な源頼朝。まず、身の回りから調べ探していく。近いといえば岩海岸。頼朝が船出した場所だ。そうやって調べていけば、簡単に分かる。ほかに、荒井城跡や石丁場のことを調べた。このクラブに入ってから後悔したことはない。むしろよかったと思っています。

6年 高橋 美香

私は、このクラブに入ってから、いろいろなことを学びました。私は転校して来たので、真鶴のくわしいことをあまり知らなかったから、このクラブに入ってから良かったと思います。一年間に荒井城・石垣山・石丁場・鎌倉・龍門寺の滝などを調べ、特に石丁場で石を割らせてもらったことは、貴重な経験ができました。これからの機会があったら、たくさんこのことを調べてみたいと思います。

5年 和泉 賢司

ぼくがこのクラブに入ってから一番知ることがしたのは、土肥実平という人の顔でした。クラブで石割りをしたり、城の元を調べたりした中で、発くつされた宋銭や昔の石工が切り出した三トシくらい石を見て驚きました。今まで調べたことをあとから生かしたいと思っています。

荒井城

6年 和田 幸子

今は公園として使われている荒井城は、昔、荒井実継の城だったそうです。そこに、縄文時代の土器や石器、館のくぎや器のかけらなどたくさん物が出て来たそうです。私はただの公園だとは思わなかったけれど、このように資料を集め

てみると、昔の人の暮らしが分かります。荒井城に行ったら、こんなことを気にかけたいと思います。

石丁場の見学

6年 宮川 弘子

石丁場で話を聞いておもしろいと思ったことは、口開に石がありその周りにたくさん小松が植わっていたので、小松石の名前がついたということです。小松石は、墓石や石垣だけでなく、建築や彫刻、うめ立てなどたくさん利用されていて、真鶴の石は、世界の中でも色や輝きがよく、品のある石だそうです。私の家のすぐ上にある石切り場を今までは漠然と見ていましたが、お話を聞いて、真鶴の産業の一つとして関心をもちました。

6年 川口 京子

石丁場には、たくさん石が並んでいて、機械がすごい音をたてていました。おじさん達はやさしく親切で、いろいろな質問に答えてくれました。石を割る時には、とても小さな道具で大きな石を割ってしまったのに驚きました。割れた小松石は、きれいな色をしていました。きれいな石のかけらを持ち帰る時、たくさん石をほり出すには大勢の協力が必要だ、この石を大切にしなければと思いました。

6年 高橋さおり

石丁場に行ってきたことは、城の石がきを作ることがきつかけで盛んになり、江戸時代には大名の丁場があったそうです。昔は、ほこりが肺に入り長生きしなかったようですが、今では、吸じん器を横に置いて仕事をするので心配がなくなつたことです。困っていることは、人手が少なく若い人がいないことだそうです。とてもよい勉強になりました。

6年 清水 美穂

一番に残ったことは、大きな石を重いハンマーで割ったことです。こんな大きな石を小さな道具で割るなんてできないと思つたけど、たいてみると、割れ目がついてきれいに割れたので、とても感動しました。わきに緑つぽくなつていてきれいな四角にけずつてある、江戸時代の石がありました。こんなに古い石があるんだからすごいなと思いました。



担当の鈴木先生と部員の皆さん

第二次関東大震災に備えて

真鶴中学校郷土研究クラブ

私達、真鶴中学校郷土研究クラブは近い将来に予想される第二次関東大震災の被害を最小限に食い止めるために、過去の地震、特に一九二三年（大正十二年）九月一日の関東大震災での真鶴の被害の様子を調査し始めました。

図一は真鶴に被害を与えた可能性のある地震、津波です。かなり高い頻度で周期的に起きていることがわかります。当然、一九二三年以来続いている平穏がそういういつまで続く筈はありません。

また、

図二は神奈川県が調査した

実際に大

地震が起

きた場合

の真鶴で

の危険箇

所です。

この図の

みならず、

危険と思

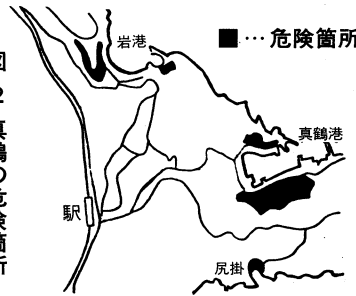


図2 真鶴の危険箇所

川県の調査

によると関東大震災や一八五四年の安政東海地震での真鶴の津波の高さは八〜十Mにも及んでいます。（図三）

そこで、郷土研究クラブでは、関東大震災を体験された方にお目にかかってお話しをうかがったり、アンケートをお願いしたりしました。アンケートの内容について示します。

質問1 大正十二年の関東大震災の時、あなたは何歳でしたか。

質問2 どこで、関東大震災にあわれましたか。

質問3 関東大震災の様子を教えてください

域は数多く

あります。

その中には

地震につき

ものの津波

での被害想

定地も頭に

入れておか

ねばなりま

せん。神奈

川県の調査

によると関

東大震災や

一八五四年

の安政東海

地震での真

鶴の津波の

高さは八〜

十Mにも及

びます。（図

(1) お宅の被害はどうでしたか。
(2) 道路、鉄道の被害はどうでしたか。
質問4 海の様子（津波）はどうでしたか。
質問5 亡くなった人達の死因を教えてください。
質問6 地震の前兆がありましたか。
私達のこの調査に数多くの方の温かいご協力をいただき心から感謝しております。このアンケートから私達は多くのことを知りました。真鶴にはまだ多くの大震災体験者が生きていらつしやること、そして、その体験が六十年たった今もかなり鮮明な記憶として残っていること。アンケートを整理してみると、真鶴地区と岩地区では被害の様子が違うことがわかります。真鶴地区では地震による倒壊、火災での死者が多く、岩地区では津波による死者が多くなっています。神奈川県調査でも、両地区とも津波の波高は約八〜十

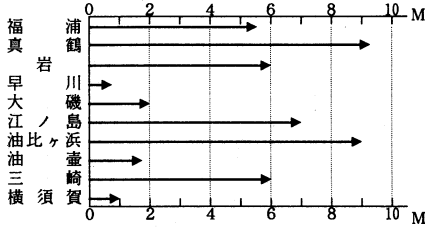


図-3 関東大震災の津波の波高

高は約八〜十



担当の二宮先生と部員の皆さん

Mと同じ高さのはずなのに、被害の様子がこんなにも違うのはその原因を改めて追求しなければならぬと思います。地形にその原因があると考え、現在、真鶴湾、岩湾の模型を製作中です。
一九二三年と現在とは、建物もまるで違っているし、住居の密集度が明白に違います。おそらく、火災の影響は計り知れないほど大きいはずですし、津波の害も八〜十Mの子想だと現在の防波堤ではまったく役に立たないでしょう。

真鶴地名考

真鶴町文化財審議委員
遠藤 勢津夫

石材業にかかわる地名II

石材業にかかわる地名については、二つの視点から考えることが必要でしょう。第一は、石材業の発展にともなうて新しく発生した地名。第二は、石材業の発展にかかわりをもった地名です。

真鶴の石材業の発展にともなうて発生した地名の代表的なものとして「専祖畑」(せんぞばた)と「口開」(くちあけ)があります。

「専祖畑」は、「石工先祖碑」(町指定文化財)の立つ周辺一帯の字名です。「石工先祖碑の周辺の畑地」の意味でしょう。専祖畑は先祖畑の変形です。

「口開」は、江戸城築城のための採石の一環として、黒田長政の家臣小河織部政良が七人の名工をひきいて、岩村の西の小松山にはじめて石丁場を開設したこと由来します。

「専祖畑」や「口開」は、まさに真鶴の石材業を実証する地名です。

次に、本来は石材業には関係なく存在した地名ですが、石材業の発展に大きな役割を果たした地名です。

まず、岩の「小松山」(こまつやま)があげられます。岩の村の西方一帯の山

をいい、前述の黒田藩がはじめて石丁場を開設しましたが、続いて水戸・尾張・紀伊の御三家や松平阿波守などの丁場も開けられました。小松山は、台地状の平坦地のため「小松原」ともよばれ、この地に開かれた丁場は小松原丁場とも言われました。ここから産出する石材は「石理至て緻密にして、且堅牢、剥落の患なし、故に碑石に用る是を最とす、故に古より御宝塔にも是を用らる」(新編相模国風土記稿)と高く評価され、銘石「小松石」として今にその名を伝えていきます。

江戸城造築のための大量な石材採掘は、先ず海岸から始まりました。採掘しやすいことと、船積み都合がよかったことによりです。「真鶴村書上帳」(町指定文化財)によりすると、「大が尻」・「白磯」・「鳴」・「駒ころばし」・「ことうばみ」・「ついし」・「元地」・「道無」・「大浜」・「尻懸」に丁場が開設されており、幕府や各大名の用石、町人、百姓の商売用の石などが採掘されていたことがわかります。この各丁場には水戸家の所管の角石・角脇石・平石などが切り置かれていました。また、「岩村字

沢尻石丁場絵図」(町指定文化財)によりますと、「沢尻」海岸にも、水戸・尾張・紀伊の御三家と松平阿波守の丁場が開設されていた様子がわかります。こうした海岸での大規模な採石によって、真鶴の海岸一帯は様相を一変いたしました。いま見る海岸の地形は、基本的には江戸初期の石材採掘によって形づくられたと言ってもよいでしょう。

さて、石材採掘は、やがて海岸から内陸部に入っていきます。前述の小松山の口開丁場などはその最初の例ですが、現在の町民センターからポツブマートのあたりには、尾張藩の「丸山丁場」があり、ここから採掘された石材は、牛車や修羅(しゆら)、人足などによりはこばれ、日和山(ひよりやま)を経て磯崎の港側の海岸「波止場」(はとば)から船積みされました。町民センター付近から町役場前の坂を登り、「石工先祖碑」の脇

を通り「口開丁場」に至るほぼ一直線の尾根道は、東海道線の開通により分断されてその機能を失いましたが、往時の石材運搬の、いわゆる産業道路の性格をもっていたのです。

石材の需要の拡大は、採掘しやすい丁場を求めて更に奥へ奥へと進出し、岩村の「岩沢山」には「ねたり丁場」・「変山丁場」・「かえるこ丁場」などの数多くの丁場が開発されていたことが古文書によって確認され、周辺の村々とその石丁場をめぐる争いもしばしば起こっていました。

いま、「小松山」から「岩沢山」一帯は、新しい技術を導入しての再開発が、町の基幹産業として展開しています。

最後に、「岩」の地名は、平安末期までには存在していましたが、石材の産出地だからその名が生じたという解釈は無理であると言わざるを得ません。

記

後

集

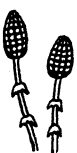
編

郷土の先人たちの知恵や努力が、文化財として遺されています。それらを生活の糧として活用していくこと、さらに後の世代によりよい姿で受け継いでいくことが私たちの使命であると思います。

このような文化財を、町民の多くの方に身近に感じていただくことが、本紙の願いです。

今号では、石材業史の特集を組みましたが、次号では漁業史の特集をする予定です。

最後に、発行にあたってご協力をいただきました方々に厚く御礼申し上げます。また、町民共有の財産である文化財の保護について、皆様のご協力をお願いいたします。



石材業史関係町指定文化財一覧

(平成元年3月現在)

真鶴町では、文化財の保護と活用をはかるため、昭和45年の第一次指定から昭和55年の第十次指定まで、多くの文化財を指定いたしました。

今号では、石材業史関係の町指定文化財を抜粋し、掲載いたします。

1. 古文書の部

※印は町所有

登録番号	名	称	時	代	備	考
20	出	入	一	件	口	書
21	心	観	院	様	御	宝
22	波	戸	場	御	用	石
23	御	本	丸	御	用	石
24	去ル戌年西御丸御献納石山元切出高員数同様今般御用石切出候見積石代銀運賃書上帳					
25	増上寺昭徳院様御宝塔御普請御用石類入札注文帳					
26	尾張様御自分御石預り帳					
27	芝増上寺用広大院様御宝帳					
28	増上寺広大院様上					
29	小田原御普請御用石代帳					
30	御宝塔御用石直段帳					

※
※
※
※
※

2. 古碑・記念碑の部

登録番号	名	称	時	代	備	考
3	頌	徳	碑	天保2年(1831)	瀧門寺境内	石材資料
4	石	工	先	祖	碑	安政6年(1859)
5	江	戸	城	用	石	と
6	水	戸	殿	石	場	の

※

3. 古地図・絵図の部

登録番号	名	称	時	代	備	考
3	岩村字沢尻、石丁場	絵図	江戸時代後期			

4. 彫刻・美術部

登録番号	名	称	時	代	備	考
2	宝	篋	印	塔	一	式
3	五		層	塔		
5	大		黒	図		